JPN. J. DRUG INFORM.（医薬品情報学）2005：6 №4：260～262

JASDI フォーラムレポート

平成16年度第1回フォーラム報告記

順天堂大学浦安病院
第1回フォーラム実行委員長
小清水　敏昌

平成16年12月14日（火）、この時季にしては比較的暖かな冬空のもと、日本医薬品情報学会のフォーラムを開催した。メインテーマは「21世紀のくすりの研究開発と医薬品情報」で、４人の演者による一人50分の講演。テーマがやや硬い内容をイメージさせる感があり参加人数に少なからず不安があったが、当日の参加者数は100名を超え企画した立場としてほっとしている。

午後１時から山崎幹夫会長の開催挨拶があり、宮城島利一氏（国立医薬品食品衛生研究所トキシコゲノミックス）を座長としてフォーラムが始まった。最初の演題は「これからの薬物相互作用を考える－薬物トランスポーターのファルマコゲノミックスからの視点」と題して石川智久先生（東京工業大学大学院生命理工学研究科教授）による魅力ある話であった。薬物相互作用を考えるには薬物代謝酵素及び薬物トランスポーターの研究が重要でこれらは薬物動態の差として現れ、その結果で薬剤応答性と副作用の差に繋がると明言した。また、Chemical Fragment Codeを用いた定量的講造活性相関および分子軌道法計算による薬物相互作用の予測について、イリノテカンを例に挙げて最前線の研究を紹介された。これらは創薬や育薬を目指す研究者に興味ある話であった。最後に先生は、ゲノム研究の裾野について述べ研究を取り巻く環境も大切で遺伝子多型の機能分析に適した測定方法を確立するため分析機器の進歩も必要であり、大学、試薬・機器メーカーなどわが国の総力を挙げ外国に流出しないようにオールジャパンでプラットホームを作るべきとして講演を終えた。第２席は、国立医薬品食品衛生研究所ＪＣＲＢ細胞バンクの増井徹先生による「くすりの研究開発と個人情報」と題する講演。ゲノムやバイオバンクなどを考えると、英国は倫理面および個人情報の面では早くから対応しているとのこと。演者が調査研究した英国における経緯や研究上の展開・問題点などを紹介し、今後のわが国おけるゲノム研究に関連する個人情報の扱い方に関して、先生の考え方を述べた。時間が足りなく、わが国の現状に即した対応についてもう少し聞きたかったと惜しまれる。

ここでcoffee breakとなり、会場のエントランスでは参加者の輪ができ、しばし話の輪も広がった。後半の講演が始まったのは予定した時間より約10分遅れであった。座長を筆者に交代し午後３時20分から始まった。

第３席は福井大学医学部付属病院薬剤部長の政田幹夫教授による「市販後情報からの育薬」で、先生の施設が以前から取り組んでいる薬剤疫学的な手法の中から、エビデンスに基づいた実例を豊富に挙げて述べ、非常に説得力のある内容であった。ＥＢＭがいわれて久しいが実際の臨床現場ではMR based Medicineの場合が多いのではないかとの指摘があった。一方、福井大学では製薬企業からの情報

石川智久先生

増井　徹先生

政田幹夫教授

宮田　満先生

では充分ではなく、自施設内でいろいろな臨床データーを基に新たなエビデンスを作っていること。抗癌剤のイレッサについても経験豊富な専門医師のみ処方することにして、期待できる新薬を適正に使うよう院内で取り決めている。また、医療経済学的な面から重篤な皮膚障害を発生した場合としての試算を行ない、少ない費用で副作用の防止が可能であると訴えた。また、最近では後発品が話題になっているが、それらの品質に問題があり不安定であり、また医薬品情報の提供も満足ではないことにも触れた。さらに、臨床の現場に登場した新薬についていろいろな情報を収集し評価し得られたエビデンスを基に患者さらに企業に還元するというような情報のサイクル化を目指すことによって、薬が育っていくのではないかとして講演を終えた。

最後の講演は、日経ＢＰ社先端技術情報センター長の宮田満先生による「ゲノム創薬の光と影」であった。講演内容はゲノム研究に関して世界的な視野に立って現状を紹介し、その研究の成果が医療やくすりの開発等に対してさまざまな影響を与えているとのこと。特に印象に残ったのは、米国では、もし患者が代謝酵素を有していることが分かった場合には、投与されている薬の用法用量を変えることを当該添付文書に記載されているという。また、代謝酵素を測定できる P450 のチップが診断薬として既にヨーロッパで認可されていることも述べ、小型のチップをスライドで紹介した。ゲノムを含む分子生物学の進歩に医療の現場が追いついているのかとの指摘には、医療現場に身を置く筆者には耳の痛い話であった。宮田先生の講演はメディアの立場をフルに生かし、ゲノム研究とこれからの医療や社会などについて多くの情報を提供していただいた。２、３年後にはゲノム情報を利用するような医療が始まるのではないかと述べられたことには、非常に考えさせられた示唆に富んだ講演であり、平成 17 年４月からは改正薬事法が施行され、医薬品も医療用具も市販後調査が従来よりも厳しくなることもあり、医療関係者はゲノムに関連する医薬品の登場やその正しい取り扱い方などをきちんと理解する必要があると思われた。

今回のフォーラムは４人の大変すばらしい講演を拝聴できた。おわりに当たって、共催した（財）日本医薬情報センター（ＪＡＰＩＣ）の首藤紘一理事長より挨拶があり午後５時 30 分には終了した。講演会終了後、演者の先生を囲み会場のエントランスでささやかな懇親会を催し、参加者同士でしばし歓談した。

なお今回はアンケート調査を行なったので報告したい。アンケート用紙を受け付けで予め参加者に渡し講演終了時に回収する方法とした。回収できた数は 64 件（回収率 63%）で、このうち参加者の所属は、企業関係者が 51 名(学術及び教育関係者が共に 13 名づつ、研究・開発 12 名、営業６名など他)。次いで病院薬剤師が５名、国立機関２名、その他の順であった。開催を知った方法は、他の団体からが 18 名でトップ、知人から 15 名、業界紙７名（日刊薬業)、雑誌６名（ファルマシア、日薬雑誌）などの他、本会のホームページから知ったと回答した人が 11 名もあった。講演内容の感想としては、面白かった 49 名、難しかった 11 名。開催時期については、ちょうど良い 11 名、12 月は避けて欲しい９名、他の時期がよい５名（９月、２月、春か秋などの意見あり)。今回の申込方法について、学会からの返事がないのが不安 36 名、わかりやすい 21 名、わかりにくい４名。この点に関しての意見として記入があったのは、事前の申込ではなくオープンの参加形式で、複数の申込方法を、メールでレスポンスがあれば、などが寄せられた。今回の申込方法はＪＡＳＤＩのアドレスにメールする方法であったが、ウイルス対策で確実に届かなかった例もあった。これは本会として今後の改善策が必要と考える。これからの希望するテーマについては、実にさまざまな意見があった。再生医療、薬物相互作用の副作用や安全性を考える、ＥＢM関係、診療ガイドライン、生命倫理や医療倫理、医療事故防止のための包装、

インターネットの医療情報を評価する、薬剤疫学的なもの、pharmacovigilance、今回の演者のようにメディアの立場から、などいろいろとご意見をいただいた。、最後に、今回の感想を尋ねたところ、15名から意見が出された。非常に興味深い内容が多く面白かった、薬剤疫学的な講演は面白かった、などとても参考になったとする意見のほかに、会の運営に関することに触れているものもあり、質問時間がもう少しほしい、決められた時間内での講演を、総合討論があればよかった、コーヒーブレイクは不要などさまざまであった。これらは今後、開催されるファーラムにとって大変参考になるご意見で感謝したい。

日本医薬品情報学会

第１回フォーラム講演会／アンケート調査

回答方法：該当するものに○印を付けるか記入して下さい。

１．性　別　　男　　女

２．年　齢　　２０歳代　　３０歳代　　４０歳代　　５０歳代　　６０歳代　　７０歳以上

３．職　業　　会社員（学術関係、営業関係、教育関係、　研究・開発関係、　製造関係、
他部署）・国立機関・大学生・大学院生・病院（医師、薬剤師、
看護師、臨床検査技師、　他部署）・その他（　　）

４．このファーラムの開催をどのように知りましたか。
雑誌から（ファルマシア、　日本薬剤師会雑誌、　東京都薬剤師会雑誌、
Pharmavision）
業界紙から（薬事日報、　日刊薬業）
知人・先輩から　　学校の教員から　　他の団体から　　学会ホームページから

５．講演の内容についてのご感想はいかがでしたか。
面白かった　　難しかった　　つまらなかった　　その他（　　）

６．今回の開催時期についてどのようにお考えですか。
ちょうどよい　12月はさけてほしい　　他の時期がよい（いつ　　頃）
特に意見なし

７．今回の申込み方法についてのご意見。
わかりやすい　　わかりにくい　返事がないのが不安　　人が対応した方が良い
他の方法がよい（例えば　　）

８．今後どのような内容を希望しますか。

９．今回、参加されて何かご意見やご感想がありましたらお書きください。

ご協力ありがとうございました。
２００４年１２月１４日

アンケート

今回は多くの参加者がありその内訳は会員77名、非会員17名、学生７名であった。各演者は自分用のパソコンを持ち込みセットしていたが、この対応も会の運営上重要と感じた。分担役の浅田和広氏（鳥居薬品）が手際よく取り扱ったのでトラブルはなかった。受付での会計や参加者の確認などについては、共催したＪＡＰＩＣの職員が手際よく対応していたき感謝したい。特に松本和男専務理事、寺村いく子業務課長には種々ご教示いただいた。また、今回のようなゲノム情報を医薬品情報の立場から考えようという企画に対して、(財）医薬情報担当者センターが理解を示して各企業の関係者に対して声を掛けてくれたことは大きな力となった。フォーラム開催前の11月下旬に分担等確認のため打ち合わせを行なった。今回は第１回目であったが非常に多くの方々のご協力をいただき特段のトラブルもなく成功裏に終了した。この要因を考えてみると、興味を呼ぶ内容であったこと、ＪＡＰＩＣと共催したこと、各分担者が責任を果たしチームワークが良かったことなどが挙げられる。

最後に、本年度第１回目のフォーラムの責任者として、いろいろと不行き届きがあったことをお詫びすると共に、今回の開催にあたり多くの方々にお世話になったことをこの紙面を借りて改めて御礼申し上げます。ありがとうございました。